

■ フォト・エッセイ ■

フィリピン / 庶民のお洒落 —— ウカイウカイ (古着屋) ——

写真・文
野澤勝美
Katsumi Nozawa



日曜日には大通りにまでせり出したウカイウカイ露天商(ダバオ市リサダ通り)

「絹の道」、「陶磁の道」、「香料の道」などアジアの特産品が国境を越えて流通する交易ルートは、経済史から明らかにされてきた。近年はこれに「古着の道」が加えられる。福家洋介氏の論文「アジアに伸びる古着の道」(『海のアジア』⑥) 岩波書店、二〇〇一年)によると今日では、東南アジア多島海に古着の道が形成されているとする。輸出業者によりコンテナに積み込まれた古着はシンガポールの古着輸入業者の倉庫に集められる。さらにそこからマレーシア・サバ州のタワウに輸送されたり、あるいはインドネシア・南東スラウェシ州のブトン島経由で東インドネシア海域の島々に持ち込まれる。このほか日本から直接コタキナバル、クチン向けに輸出されるものもある。サバ州タワウからは、フィリピンのスルー諸島、さらにはミンダナオ島にも古着が回っている。日本では廃棄物扱いの古着といえども、東南アジア多島海では国際商品なのである。

今日ではフィリピン全島にみられるウカイウカイ(古着屋)をその発祥の地であるミンダナオ島ダバオ市で訪ねてみた。ウカイウカイはセブ語の「かき回す」(tikay-ukay) からきている。平台上に積んだ衣類の山をお客がかき回す日本のバーゲンストア売場に見られる光景とどこか共通するようである。

ミンダナオ島は、金、銅など豊かな地下資源と広大な未開墾地を有することから



吊るして売られる婦人服。簡易店舗のウカイウカイ

「約束の地」とされ、最後のフロンティアとして一九六〇年代以降はルソン島などから農業移住も奨励され地方開発の拠点となってきた。アキノ政権発足後はムスリム・ミンダナオ自治区の発足など、ミンダナオ開発の制度構築の基礎ができた。しかしながら長年のイスラム教徒反政府活動は終息せず今日に至るも経済開発は遅々として進まない。かくして、ミンダナオの貧困者比率は二〇〇六年に四五・五%と全国平均の三二・九%に比較し二二・六ポイントも高く、この貧困層がまた反政府活動の基盤となっている。生計向上どころか経済停滞で生活危機に直面した庶民の生活防衛に貢献するのが安価な古着の登場である。

ミンダナオ島ダバオは、戦前に日本人によるアバカ（マニラ麻）栽培の移住で知られている。最盛期には二万人を超える日本人がいたとされ、今日でもわずかにその痕跡が残されている。

そのダバオ市の下町のリサダ通りにあるコマーシャル・センターの一角にウカイウカイが一〇〇軒ほど軒を連ねている。古着屋の店舗形態は大きく三つに分けることができる。露天商、簡易店舗、冷房装置つきの高級品店舗である。ビルの軒下の簡易店舗も道路にせり出して商品を並べており露天商と重なり合っている。

簡易店舗の店員からの聞き取りによるとここでの古着は、一九八〇年代初めにフィリピン人船員がダバオ港のサンタアナ桟橋



ミッキーマウス、ピカチュウ、トトロなどの縫いぐるみも登場する露天商

から市内に運び込んだのが最初とのことである。当初は違法であったが現在は市当局から許可を受けている。

商品の古着は、一〇〇キロ単位の束（バンドル）で仕入れ、種類・品質ごとに選別される。アメリカ、日本、韓国、インドネシア、バングラデシュから入荷するが、近年とくに多いのが韓国製品である。扱った商品の中心はやはり婦人物とのこと。材質、デザインなどのよい売れ筋商品は別扱いされ高級品店舗で売られているが、それでも一着二五〇〜三〇〇ペソ（五〇〇〜六〇〇円）と格安である。路上では衣類のみならず、縫いぐるみ、鞆類も売っている。

リサダ通りでは、日曜日ともなれば大通り歩道を占有しにわか仕立ての露天商が店開きをする。衣類ばかりではなく、近くに女性客の欲しがるような中古ミシンの専門店も登場している。日本人のサプライヤーが持ち込んだもので品質もよく一台三五〇〇ペソ（七〇〇〇円）である。

前述の通り、ウカイウカイはミンダナオだけではなくビサヤ地方、さらにはルソン島でも散見できる。地方デパートではウカイウカイ・コーナーを設けているところもある。フィリピンでは古着屋はお洒落な庶民に受け入れられている。

古着屋が繁盛する背景には国内では良質で安価、かつデザインの優れた国産衣類が出回らない現実がある。本来、衣料産業は国内需要を対象とした軽工業として自立的



日本からの輸入の中古ミシンは女性の注目を引く

発展が期待される。ところが大衆向け衣料製造は、技術力や良質な原材料の不足で発展することはなかったのである。

確かに、縫製品の輸出額は電気電子機器・部品に次ぎ第二位で外貨獲得に貢献してきた。しかし輸出縫製品産業は、紳士服縫製などにみられるように外国の技術と輸入原材料に依存しているのが現実である。

良質な原材料が不足するのは、政府が投資奨励をしてきたにもかかわらず、資本や技術力のある外国企業が川上の繊維産業に参入しにくかったからである。これは、国内の縫製業者の需要は安価な生地であり高級生地がないなど、企業進出のメリットが少なかったことに起因するようである。

日本の古着の歴史をみると、江戸時代、江戸古着の中心は富澤町川岸の朝市にあった。これが明治期になると緑河岸（現在の小伝馬町と馬喰町の間）に移転した。緑河岸市が重要なのは、この時期に最初の既製服がこの古着市場に登場したことである。今日、小伝馬町、馬喰町、横山町界隈は衣料品の問屋街として全国一である。古着朝市がその後、衣類問屋の集積形成に結び付いたわけである。

ダバオ市のリサダ通りの古着屋が、いつの日にか国産衣料品問屋街を形成し、周辺の東南アジア多島海の市場に輸出するまでに発展することを期待してやまない。

（のざわ かつみ／亜細亜大学教授）